

献 辞

社会学部長 石 田 易 司

2011年3月末を持って、桃山学院大学の定年を迎えられる北川紀男教授の退職を心から惜しんで、ささやかな文章を綴ってみたい。

多くの方がご存知の事実であるが、北川先生は1969年4月1日から42年の長きにわたって、本学で学生の指導に当たってこられた。1980年に教授ご就任以来でも30年の長い日月が費やされている。この間、副学長、社会学部長、社会学研究科長、図書館長をはじめ、学内の要職をずっと、絶えることなく務めてこられた。今改めて先生の学内での役職の履歴を数えてみると、28もの数になることに、驚かされるのである。

私がこの大学に職を得たときも副学長の職に就かれていた。新任の教員を見る目の温かかったこと。いつも穏やかで、笑顔で、廊下を静かに歩いておられた。歩く姿だけでなく、多くの場面で、こういう人が研究者というのだろうかという姿勢でおられた。どんな些細なことにでも誠実そのものの姿で対応されていた。若い者から見ると多少丁寧すぎることもあったけれど。

福祉の世界にいる私が特に強く北川先生を意識したのは、ある児童養護施設長が、北川先生がご近所にお住まいだということを、とてもうれしげに、誇らしげに語ってこられたからだ。私の知る多くの研究者は、ご近所付き合いなどしていないものだ。大学での私の印象と寸分違わないご近所の方の印象は、まさに北川先生そのものの姿なのだろうと実感した。愛すべき隣人だと言葉を強めておっしゃっていた。

いつごろから今のご自宅にお住まいなのかは知らないけれど、琵琶湖の西、

京都を越えた、雪の降る、坂の町から、おそらく2時間余の時間をかけてこの大学へ通い続けておられることだけでも、先生の誠実さが伺われる。

残念ながら、異なる専門分野に属する私は、先生の学問的業績の多くを知らない。また、そのことを評価できる立場でもない。しかし、教授会で見せられる少しのあいまいさも許さないという姿勢は、研究に携わられる姿勢そのものなのだろう。

そんな笑顔で、穏やかで、やさしげな先生に悲しい事実が襲ったときのことが、私には忘れられない。聞くところによると、長く臥せっておられたらしいお嬢さんがお亡くなりになった時のことだ。その悲しみがどれほど大きかったかは、娘を持つ一人の親として想像を絶するものがある。

しかし、葬送の儀式を終えられて大学に戻ってこられた先生は、そのときも笑顔で、丁寧に、欠勤をわびておられた。ご自身の悲しみを抑えて、平素の教授の姿に戻っておられたのである。

最近の北川先生は、部長をされているハンドボール部の活躍に一喜一憂されている様子がほほえましい。定年退職を直前にしても、若い学生たちの活躍に目が離せないばかりか、先頭に立って、勝敗の行方を追っておられるのだ。きっと心はまだまだお若いに違いない。

4月以後も、非常勤でお世話になることが決まっている。週に一度でも、北川先生のお顔を伺うことが出来るのはうれしいことである。その笑顔を見るたびに自分の衿を正して、先生を見習って、私も誠実に教員生活を送りたい。

大きな感謝の気持ちを込めて、北川紀男退官記念社会学論集のはじめの言葉としたい。